

〈要約〉

資本主義の「金融化」とは何か

Essay on Financialization of Capitalism

小 西 一 雄
Kazuo Konishi

国際金融の世界では1980年代前半から、日本では1990年代中頃から、実体経済の成長をはるかに上回る金融活動が展開されている。このような資本主義の「金融化」はどのような構造をもち、現代経済にとってどのような意味をもっているのか。金融収益と実体経済が生み出す富（実体的富）とを区別しない主流派の経済学は、「金融化」を新たな収益機会の拡大であり資本主義の発展であると把握する。これに対して金融収益は究極のところ実体的富の再配分であるとする経済学は、「金融化」は資本主義の「行き詰まり」を示す現象のひとつであると把握する。筆者は後者の立場にたっている。日本をはじめとする先進資本主義国では大量消費・大量生産を可能とする主要産業で市場が「成熟化」し、売上高が伸びないという事態が長く続いている。売上高が伸びないので設備投資も抑制的とならざるを得ない。そこで大企業を中心に企業は利潤を本来の事業の拡大に使うのではなく、貨幣的に蓄積するほかはないという事態が到来している。このような実体経済から引きあげられて金融資産の蓄積に回らざるを得ない貨幣資本、それが「金融化」を支えている。

金融資産に流入する貨幣資本の増大は証券形態をとった金融資産の価格を膨張させ、キャピタルゲインのチャンスを拡大する。しかし仕組債などいかに高度な証券化技法を使った金融商品でも、その基礎には住宅ローンのような既存のローンの世界、インカムゲインの世界があり、インカムゲインの動向は実体経済の動向によって規定される。したがって、長期停滞下でインカムゲインの世界は決して魅力的なものではない。だから現在は、金融資産が膨張せざるを得ない構造と、その基礎をなすインカムゲインは実体経済の周期的変動によって限界に直面せざるを得ないという構造との矛盾が、周期的な金融経済危機として現れる時代なのである。